



平成 29 年度 春の特集展

グラビア四版切手に見る工芸官の技と表現

刻線の美

Engravers & Designers in National Printing Bureau

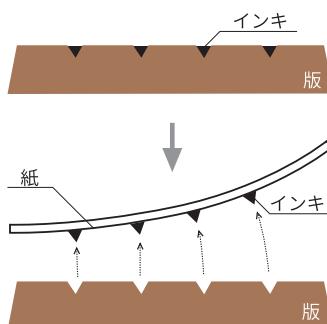


2017.4.18 [火] - 5.14 [日]



独立行政法人 国立印刷局
お札と切手の博物館

原版彫刻と凹版印刷



お札や諸証券（切手、収入印紙、国債など）の原版彫刻、デザインなどは、工芸官という専門職員が行っている。工芸官は、お札の肖像部分や枠などの主な模様をビュランという特殊な彫刻刀を用いて、手作業で銅板に曲線や点線で図柄を彫刻し、原版を製作する。その彫刻には熟練を要し、1ミリ幅に10数本もの細い線を彫るという緻密さである。

彫刻された画線の溝にインキを詰め、紙と版面に高い圧力をかけてインキを紙に写し取る方法が「凹版印刷」で、紙に写ったインキが盛り上がるため、重厚な印象に仕上がるとともに、ざらざらとした独特の手触りとなり、偽造防止にも役立っている。

凹版印刷は15世紀頃ヨーロッパで発明された伝統のある方式で、イギリスで発行された世界最初の切手「ペニー・ブラック」(1840年)もこの方式によるものである。

「グラビア印刷」とは

グラビア印刷は、写真で得られた画像を細かい格子状のます目に分割し、その明暗に応じて深さを変えた凹みを作り、その中のインキを紙に写し取る印刷方式である。グラビア印刷による切手は、華やかな色彩、微妙な色彩の変化、細かい部分まで表現できるという特長がある。

「グラビア + 凹版印刷」の技術

「凹版印刷」と「グラビア印刷」という異なる方式を組み合わせたのが「グラビア凹版印刷」という技術で、日本では唯一、国立印刷局のみが手がけている。凹版の画線による重厚感と、グラビアの豊かな色彩表現を合わせることにより、芸術性の高い切手を生み出すために採用された。

グラビア凹版切手の名作「東照宮陽明門」



「東照宮陽明門」



部分

龍の装飾部分は細かく線を重ねて巧みに立体感を出す。柱の部分はあえて彫り込まず、白く抜くことで光を表現し、装飾の重厚感を強調させている。

本格的なグラビア凹版切手は、第1～3次国宝切手シリーズ（昭和42（1967）年～平成元（1989）年）に採用され、多くの名品を生み出した。特に、第二次国宝シリーズ第8集「東照宮陽明門」（昭和53年）は、グラビア凹版切手の名作といわれている。この原版の彫刻を担当した工芸官の押切勝造は、戦後最高の名手といわれ、1ミリの幅に10数本の線を彫ることができたという。わずか36ミリ×51ミリ四方の小さな空間の中にぎっしりと詰め込むように、陽明門の絢爛豪華な彫刻や金具が細部まで再現されている。息を呑むような緻密さとは対照的に、背景には朝靄に包まれたような木々が広がり、静謐な空気を感じさせるなど、高い技術と表現力が伺える。こうした緻密な画線による構成や重厚な表現は、グラビア凹版の特色が存分に活かされた切手であるともいえる。

押切はこの切手の原版を彫刻する際、何度も現地に足を運び、理想の構図を得るため、陽明門の前の木に自らを縄でくくりつけて写生を行ったという逸話も残っている。



原版を彫刻する押切勝造（昭和28年頃）

途絶えてしまった「グラビア凹版切手」

グラビア凹版切手は、昭和 54(1979) 年頃には全発行件数の 40 パーセントを占めるなど、一時期さかんに製造されていた。この「国宝シリーズ」のほか、「相撲絵」、「近代美術」、「近代洋風建築」など優れたシリーズ切手が相次いで発行されたが、グラビア凹版は製版や印刷の工程が複雑なうえ、特殊な技術を要するためコストがかかりことなどにより、その発行数は減少し、次第に主流を外れていくことになる。

しかしながら、格調のある図柄や凹版彫刻ならではの重厚な表現が必要とされるときなどには、このグラビア凹版の技術が採用された。「日本の民家シリーズ」(平成 9 (1997) 年～ 11 年)、ふるさと切手「中山道妻籠宿・馬籠宿」(平成 11 年)などのほか、優れた凹版切手が発行されていたが、著名な文化人たちの肖像を描いた人気のシリーズ「文化人切手」(平成 4 ～ 16 年)の終了とともに、その発行は途絶えてしまった。



ふるさと切手
「中山道妻籠宿・馬籠宿」

「グラビア凹版切手」の復活



しばらくの間、1000 円切手「松鷹図」が唯一のグラビア凹版切手となっていたが、消費税改定により普通切手のデザインが一新された平成 27 年、新普通切手 1000 円「富士図」が登場し、約 10 年ぶりにグラビア凹版切手が発行された。さらに、「日本の建築シリーズ第 1 集」(平成 28 年)、「日本の建築シリーズ第 2 集」(平成 29 年) が相次いで

発行され、グラビア凹版切手は再び注目を集めている。

現在、切手の印刷は、比較的容易に製版や印刷が可能なオフセット(平版)によるものが主流であり、グラビア凹版による切手は世界的にも減少傾向にある。しかしながら、独特の風合いや色彩を持つグラビア凹版切手は、通常の印刷による切手とはまた違った魅力を持つもので、依然として需要があり人気も高い。この原版を彫刻するために工芸官たちの技術は欠かすことのできないものであり、印刷局に長く受け継がれてきたものもある。現在もこの技術を絶やすことのないよう研鑽が積まれている。



「日本の建築シリーズ」第 1 集



「日本の建築シリーズ」第 2 集